

攻撃的感情を治める

友定 啓子

はじめに

前二回で、最近の幼児の攻撃的行動についていくつかの事実を述べた。今回は、攻撃・怒りそのものについて、考えてみたい。少し迷走状態になるかも知れないけれど、お許しいただきたい。

幼児と中学生

私は教育学部にいるので、小中学校の現場の先生と話す機会がよくある。そこで幼児の話をする、中学生と全く一緒だといわれることがよくある。中学校の先生から、「待てない生徒がいるんだけど、そういう

ことはいつ教えるの？」などと聞かれたりする。一般にいう幼児期でクリアしているはずの基本的行動が全然できてないらしい。そういう中学生に、家庭科で保育を教えるわけであるから、現場では幼児のことを教えるような形をとりながら、実は中学生自身の生活改善をねらったりしている。

私自身も近年、幼児の行動や感情を記述していると、それにひきずられて、中高生の行動が浮かんできてる。それだけ似ているのだ。ということは、その一〇年間、ほとんど成長していないということになる。

先日、大学院の授業で、幼児の行動について細かく書いた文章を読んで、討論に入った。受講生に現職の中学校の先生がいて、「このまんまの生徒がいる」と発言した。思わず「このまんまって？」と聞くと、「この通りですよ、自分の思い通りにならないと、いきなりものに当たる」「ものに当たるって？」「ガラスです。ガラスを素手で壊すんです。手が切れてけがをするんだけど。それからドアを蹴破る。壁に当たると

か」「それは主に男子？」「いや、男も女も」「えっ、女の子も当たるんですか」「そうです」。

「思い通りにならない時って？」「自分の意見が通らない時。」「たとえば？」「卒業アルバムを作っていて、どの写真を載せるかという時に自分の載せたい写真が取り上げられなかったとき。いきなり、そばの窓ガラスをぶちやぶる」。思わず「そういうとき、先生方はどういう風に対処するんですか」と聞くと、決まっているようで、けがの手当てをする人、保護者に連絡する人、話を聞く人、周囲の生徒を治める人など手分けしてあたるとのこと。どうもその話からは、中学校ではそんなに珍しいシーンではないようだった。

「それで、その子はその気持ちが出まるんですか、納得するんですか」と聞くと、「いや、そうでもないけど、でもまあ、ガラスを破ってスカツとするとか」「なにか」という答え。で、私はしつこく聞いていく。「なぜ、ガラスですか？ 他のものじゃなくて」「いや、ガラスがそこにあるからです。話している横に窓が

あるので」「ガラスは、壊すとすごい音がして、スカツとするし。それに、ガラスを壊せる強い自分だということもあるし。あと、周囲に対して、こんな風には自分はすごく怒っているんだという表現でもあるんです。けがをすることは考えていないんです。他にドアを蹴ります。ドアは安物だと、穴があくし、壁は靴の跡が残るし」。

なるほど、その中学生にとってガラスを割るという行為は、自分の怒りを表現するための行動らしい。

ことばと思考の喪失

しかし、その表現は何の役に立っているのだろうか。もしその子に、ことばがあつたなら、この写真はこれこれこういうわけで、アルバムに載せたいんだと言えただろう。そして、相手も自分はこう考えるから、別のがいいと言ったなら、またそこで、どうしようかと話が進むはずだ。そしてそれで納得して自分の意見が採用されなくても、自分で気持ちを治めること

ができるかもしれない。もちろんいやな思いは残るだろうが、その思いもことばで表現できれば、新たな方向がでる可能性もある。今回はこうだったけれど、次回はどういう思いになるかもしれない。さらに、子どもたちの間に、採用されない人の気持ちに対することばがあれば、自分が全面否定されたと思わずに、怒りまで至らなかつたかも知れない。そういう思考過程がすべて吹き飛んでしまっている。

自然からの逆照射

このような悔しさやつらさのようなマイナスの感情を、人はどのように自分の中で治めていくのだろうか。それぞれのやり方があるとは思いますが、そこにはいつも自分を映しだしてくれる自然や人のことばがあるように思う。自然は何も言ってはくれないが、逆に無言であることによって、人は自分の思いと向き合えるのではないかと思う。

ガラスではなく壁はどうなのかと考えたときに、ひ

とり砂場で長時間穴を掘っていた子どもを思っ
た。そして、大地は適度な抵抗で、自己に対抗してく
るといふ、バシユラルの言葉を思い出した。壁やガ
ラスのような人工物にぶつかっていった時と、土や砂
や水や生き物のような自然物に向かった時とは、ふ
ところの深さが違う。昔のワンパターンの青春ドラマ
での、夕日に向かって海辺を走ったりするシーンも、
その典型的表現とも考えられる。受け止めきれない自
己の感情をそうやって昇華させることができた。そう
いう空間や時間があった。自然に包まれたり向かい
合ったりしながら、自分を見つめることができた。そ
うちっけな自分に気づいたり、自分の間違いに気づい
たり、認めたくない自分の感情を直視したりすること
ができた。今、そのような場所や時間が子ども達に残

されているのだろうか。逃げこむ先が自分の部屋で
は、そこはあまりにも饒舌で、自分を見つめることは
難しいのではないか。

谷川俊太郎の『あな』という素朴な絵本がある。こ
のお話は、日曜日の朝、なにもすることがなかったの
で、僕は穴を掘り始めた、というところから始まる。
無心で、しかし全力で大地を掘る僕に対して、周囲の
人が様々なことばを投げかけてくる。最後に穴の底に
じっと座ったときに、僕は僕だということに出会う物
語だ。自己認識の本である。このように直接自分の五
感で自然に対峙することが、自分というものを認識
し、再生させるのに重要な時空間だと思う。

他者のことばに出会う

私自身は、否定的な感情でやりきれない
ときにどういう風に自分をなだめるかとい
うと、たいてい本を読むことにしている。
ちよつと自分と離れたことばに向かい合っ



ていると、ちっけな自分に気づかされ、いつのまにか怒りがおさまっていることが多い。お説教ではないことばが、自分を立ち直らせてくれたり、元氣を与えてくれる。昔読んだたくさんの詩や文学が自分を支えてくれているというと思う。

NHKドラマ「すずらん」は、主人公の少女がいくつもの苦しみを乗り越えて成長する物語だが、何も持たない彼女が生きる支えにしていたものは、大自然そのものとことばである。それは詩であったり、周囲の人たちのことばであった。つらさや悲しさに直面した時、支えにするのは他者からのことばのメッセージだ。

前述の中学校の先生は、今の中学生は表現力が足りないから、ディベートなどが必要だといっておられた。それもいいかもしれないが、相手をうち負かすことばを探す以上に、それ以前に自分をみつめることば、他者を理解することばに出会わせてやりたいと思う。

今の子ども達は、昔とは比べものにならないくらい、大量のことばの中にいるが、あたたかいことばや毅然としたことばにはあまり出会っていないように思う。

『ムカツク構造』の著者の齋藤孝氏は「ムカツク」という価値感覚をのり越える主要な方法の一つとして、読書をあげている。他者のことばに出会う、それはそのことばに対峙して自分の感情を相対化することにつながる。

幼児は内言を持たない

幼児は、自分の感情をあまり自覚していない。自分の否定的な感情がすぐに他者に向けられてしまうこともある。そういう状態になったとき、保育者が「悲しかったね」「痛かったね」「○○ちゃんに、とられていやなんだね」などと、こちらがことばで気持ちを表してやる。そうすると子どもは「そうだよ、悲しいんだよ」「さびしいんだよ」と、自分の状態をことばで表

現できることを知る。そうやってわかってもらえるだけで、怒りに転化せずにすむ。幼児は思考過程ができて、怒りが与えられることによって、表現のすべを学ぶ。ことばが難しければ、行動でもいい。向けても差し支えないものに怒りを向ける方法を教える。

怒りは行動に結びつく。怒りは自分以外のものに責任があつて自分は悪くないという表明だ。相手が自分を怒らせたので、相手が悪いんだと考えるので自分を見つめる契機にはならない。怒りの感情は、自分の側に引き寄せなければ、それを克服することにはつながらない。

自分がなぜ怒ったのか、そこにはもう一つ前の感情があるはずなのだ。そこを自覚し、解決しなければ、怒りの感情は消えない。ましてや人を攻撃しても、感情はおさまるかも知れないが、問題は解決しない。攻撃が攻撃を呼ぶことになることもある。

攻撃の快感

これまでずっと私は、攻撃行動はコントロールされるべきものとして、扱ってきた。しかし、一方でガラスを割って「スカッとする」という、前述の表現にも見られるように、攻撃行動は本人にとっては「快」であるという事実がある。意地悪をしたり、人の悪口を言うのも快感がある。そしてそれをもっとも端的に示すのが「攻撃の笑い」である。優越感に基づいた笑いである。相手を否定することが自分にとって快であるというこの現象を、人間は乗り越えることができるのだろうか。

一方の快が他方の不快であがなわれるというこの関係が、人間の持つ不条理なのかと思うことがある。人と人との関係は、共生にもなり、競走にもなる。競走の場合、一方の勝利は他方の敗北である。

昨年の保育学界のシンポジウムで酒鬼薔薇事件が取り上げられたが、その中で、本田和子氏はあの事件で

は、少年達から「どうして人を殺してはいけないのか」という問いかけが発せられたのだと述べていた。それまで営々と積み上げられてきた「人を殺すなかれ」という価値観に、疑義が唱えられたのであって、そういう深い地平からの問いかけなのだということであつた。

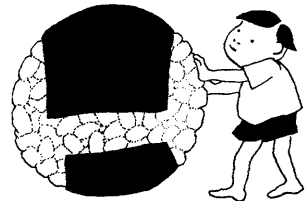
そういう正反対のことが起こる。つまり、自分にとっては快感であつてもやつてはならぬことがあるということをわからせるというのは、その子の中に、他者の視点を持ち込むということである。その表裏一体の関係を自分も引き受けるということでもある。あなただけが相手の不快になることがあるのだということをお伝え、それはコントロールすべきなのだというわけにばならない。いずれわかるようになるということではない。

いじめだつて、本人は「僕は強い」といって、弱い子を戦いごっことして蹴っていたりする。まさに自分にとっての快感なのである。自己の視点のみではお

もしろかったり、遊びだつたりして、悪いことだとは感じとることできない。いじめているという自覚は他者の視点を持ち込まなければ、決して出てこないものだ。セクハラも差別も同じ構造を持っている。

表現としての攻撃

行動は表現であると考えれば、攻撃もまたひとつの表現である。再び元に戻るようだが、攻撃というのは、いくらことばで語りかけてもわかってくれないとき、最後の表現手段として、用いられることがある。親が子どもにいくら言い聞かせても伝わらないと思つたとき、つい手が出るのがいい例だ。逆に、はじめからことばが出なくて、攻撃になることもある。怒り心



頭でことばを失ってしまった時か、自分で状況がつかめず、言えない時だ。はじめにしろ後にしろ、ことばという表現媒体が使えないときにそうなる。だからそれをことばで表現せよということが無理といえど無理なのかも知れない。

幼児期に、自分の感情をことばで表現せよというのは、かなりたいへんなことである。それには、大人がよいことは環境を用意してやるしかないだろう。攻撃行動のコントロールができるような体験を共に作っていくしかない。怒りにまかせて行動してしまい、他者をそこなう自分であつていいはずがない。それでは他者と共存できない。

イノセンスの表明

前回まで取りあげた幼児の攻撃行動は、ねじれ表現ともいえるもので、いきなり殴りかかってくるというものだった。攻撃的行動の陰に隠れた感情を見つけ、それにことばを与えながら、相手の感情の昇華につき

合う。が、多くの場合、こつちを向いてほしいというサインだと受け取った方がいいようだ。集団になると収拾がつかないという問題は残っているが。また、相手の優しさを利用して、やりたい放題をするという攻撃は、他者の視点が欠けているということだ。幼児だからわからないといわずに、これにはやはり、他者として毅然と表明していくしかない。

現代の子どもたちが攻撃的感情をため込んでいるという指摘は、あちこちでなされている。それは、自然環境の破壊から、発達環境の剥奪、人間関係の崩壊、メディアによる直接体験の放逐、競争的環境による異常な緊張など、もはや人間として育っていくための基本条件さえ危ういこの社会のありようへの、彼らの無意識の抗議なのかも知れない。ふつうの子でいることさえ許されない社会へのイノセンスの表明ともいえる。

(山口大学)